臼井吉見

安曇野

第二部

安曇野　第二部

昭和四十五年十一月三十日第一刷発行
昭和四十九年四月一日第六刷発行

著者　臼井吉見

発行者　井上達三

印刷　大日本法令印刷
製本　鈴木製本

発行所　筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京四一二一三
電話東京二一一九七六五一

©臼井吉見
一九七〇

（分類）0093（製品）80063（出版社）4604

安曇野

第二部

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

その一

中村彝と中原悌二郎とが、いつものようにつれだって、仕事部屋につづく土間に顔を見せたとき、荻原守衛は、「婦人画報」記者の風巻久美子を相手に、口述をはじめたところだった。

『文覚』ですか。あれゃ駄目なんだ。日がなくて、四十日そこそこで仕上げたんでね。意あまって、いきみすぎている。もっと、あたりまえの、冷っこい中に熱気がこもっていなくちゃいけなかったんだが。形相ばかり強くってね。内的な力が、さっぱり出ていないのだ。はじめは六尺ばかりのものをやりかけたんだが、いつのまにか、ミケランジェロの奴隷のようになってしまってね。立ってるほうじゃない。しゃがんで、手をこうやっているほうのやつに似てきたので、叩っ壊してしまったんですよ。だから日がなくなっちゃったんだ。

ミケランジェロの奴隷は、フロレンスのボルボリ園の洞穴のなかにありますがね、未完成のような、壊れたような、実に感じの大きな面白いもんですよ。どうも一つの思想を彫刻にするということは、西洋では昔からやり尽しているし、僕らはそれをまたいつも見てるもんだから、ついそんなものに似て来てこまるんだね。『文覚』のほかに二つ出したんだが、それはお断りを食った。一つは女の

胴ばかりで、首も腕も足もないのさ。これは落第だろうとは思っていた。もう一つはパリの学校で青年のモデルを使った習作なんだが、こっちは出してもらいたかったのだが、駄目だった。胸から上だけのもんだから、日本の展覧会の陳列にはこまるかもしれないですね。

出品やなにか人に頼んで、用事があったから、僕は郷里へ帰った。東京へ出て、停車場からその足で展覧会へ行ってみた。わざわざ切符を買ってね。特別室の彫刻を見たいと思って、入ろうとすると、いけません、という。どうしたら、見られるのかと聞くと、事務所へ行って話せという。事務所へ行くと、隅のほうに僕の彫刻が二つ置いてあるのさ。落第したのがね。どなたかって聞くから、荻原だというと、そんなら優待券も行ってるはずですのになんてね。落っこちた彫刻を引取ってくれっていったけれど、今日は用意をして来ていないから駄目だ。『坑夫』――ジュリアンでこさえたやつだ、あのほうは出してくれるとよかったんだのに、こまるねえと言って笑ったら、エー後でそういうお話も承りました、こっちがお得意なのだということを聞いておりますって、そう言ってましたがね」

「その『坑夫』ですが、いま、どちらにございますか」

筆記の手を休めて、久美子は守衛の顔をまっすぐ見た。

「それ、そこにあるよ。あなたのうしろに」

守衛は指さすと同時に立ちあがって、土間におり、仕事部屋へあがった。十坪あまりの部屋には、仕事台の上に、制作中と思われる粘土の大きな塊が、いくつか、ズックの布や、破れ毛布や、古浴衣などをかぶっていた。

「これですよ。落第した『坑夫』ってのは」

守衛が指さしたのは、斜左から見た一青年の石膏胸像だった。労働する若者の力に溢れ、眉のあた

りには、若者独特の不屈な神経がふるえている。見るからにねばり強い肉づけがそこにあった。
「フランスの青年ですね」
「モデルはイタリア人の若者ですがね。綱を引っぱらせてポーズをさせたんですよ。これをつくっているとき、高村光太郎君が、一週間ほど、ロンドンからパリへやって来たので、ジュリアンの教室へ案内して、粘土のままを見てもらったんだ。あてがわれたポーズという感じがまるでない、といって、幾度もうしろへさがっては、のっぽなからだをまげるようにして眺め、また近寄っては見つめて、これはいいとほめてくれた。教室の習作としてこわしてしまうのは惜しいから、ぜひ石膏にとれ、帰国のときは、必ず持って行けなどと、喜ばせてくれたんで、その意見にしたがったわけだがね。未完成ということで落っこちたらしい。未完成といえば、『文覚』だって未完成さ。そもそも彫刻の完成品てのは、どんなものかね。未完成の完成とでも呼べるものができれば、それに越したことはないがね……」
「鼻すじのきびしく通ったところに若者らしい自信が出ていますね。目はつぶっているのでしょうか、ずっと遠くのほうを見ていますね」
「目のつぶれためくらと見る友人もいますがね。遠くを見つめている感じがありますか……」
守衛としては、見えない目で遠くを見つめているとでも言ってほしいところだった。ロンドンで光太郎にエジプト彫刻のよさを教えられ、大英博物館で、その実物に接してから、むやみにエジプト彫刻が好きになり、パリへ帰ってからも、午後はルーブル美術館へ日参して、エジプト彫刻の前に立った。どれもこれも、へんてつもない左右相称の構図で、固定的でありながら、男にしろ、女にしろ、両眼をらんらんとかがやかせて、永遠を見つめているようなところがあった。夫婦像にしても、めい

めいが単独に永遠のかなたに見入っているところに、愛情の永続を信じて疑わないけはいがある。古代エジプト彫刻の永遠の目つきが、この『坑夫』のそれにちらっとでも宿っているとすれば、これにまさる喜びはなかったのだ。

「女の胴っていうのは、これですね。なるほど、首もなく、手も足もありませんね」

「そうなんだ。あれはね。ジュリアンで勉強してたころ、隣の教室のモデルを盗んでこさえたんですよ。生徒が二組に分れて、それぞれ一人ずつモデルを使ったんだが、僕らのほうへ来たやつは成ってないんだ。で、隣を見ると、これはすこぶるいい。殊にソファの上に仰向いている両腋下から腰へ落ちている線がたまらなくいい。そこで、自分のほうのモデルはそっちのけで、隣のやつを盗み見して、とっさにこねあげたんだ。案の定、見つかって、叱られましてね。そのままやめてしまった。だから、首もなければ足も手もない。胴だけの化物(ばけもの)になってしまった。しかし、僕の目に強い印象を与えた腋下から腰のあたりへ落ちてくる線の美しさだけは、自分でもどうにかつかまえたと思っていますがね」

「刹那の印象ですね」

「そう、そう、あれくらい僕が刹那の印象に忠実にやったものはない。元来、僕は刹那の印象さえつかまえれば、あとはほっといてもできるという考えですがね。『坑夫』が未完成ということになると、これが未完成なことはわかりきってる。落ちるのはあたりまえでしょう」

そう言いながら、守衛は居間へ戻った。久美子はあとを追うように、

「ロダンについて聞かして下さいませんか」

「ははははは、またロダンかね。ロダンなら、このふたりのほうが熱くなってる最中ですよ。ふたりに

聞くのがいい」
守衛は、大きな声で笑った。
「荻原さんはロダンの作をごらんになって、彫刻へお進みになったそうですね」
久美子が、かまわず問いかけると、悌二郎が引きとった。
「そうなんですよ。パリの春のサロンでロダンの『考える人』にめぐり合ったのが、彫刻家になろうとした機縁らしいですね」
彝が言葉をはさんだ。
「それからは寝ても醒めてもロダン、ロダンということになってね」
「その『考える人』っていうのは、どんな作かしら」
「これ、これですよ」
守衛は机の上に出してあった、大きな写真帳をとって、開いてみせた。
「ダンテの『神曲』中のひとり、地獄の戸口に立って、門を眺めながら、宇宙人生の真相を思いめぐらしている人なんですね。頭のてっぺんから足の爪さきまで、ぎっちり想がつまってる。人間の想というものがあったら、その形はこれだと思ったわけなんだ。ところで、この写真を見給え。これがバルザックの像ですよ。石膏の、なんとも薄汚ないお化けみたいでしょう。ひっかけてるのはガウンだろうが、日本のどてらみたいですね。フランスでもはじめは認められなかったそうです。だが、どんなバルザックよりも、これがほんもののような気がしてくるから妙だ。バルザックのいのちをつかんでるわけですね。ロダンの初期の傑作は、『原始の人』でしょう。これですよ。しかし、先生の最大傑作は、ジャン・ポール・ローランの半身像だろうと僕は思う。これがそれです。なんとも傑作です

ね。

ロダン先生のことを思うにつけても、芸術は人格なりですね。古いがそれに尽きてる。思邪なしにうけとって、人格を透して表現する、それよりほかにない。

日曜なぞに面会に行くと、客をそばにおいて、モデルを見ながら、テーブルの紙面には目を落さないで、スケッチしている。僕が最後にお訪ねしたのはその画室でした。いよいよ、お別れというので、そこに白い布で覆いをしてあった、たくさんの作品の中の、気に入ったのの覆いをはねて、これこれを見て行きなさいと言われて、僕が念入りにそれを見てまわっている間、先生は向うへ行って、制作中の半身像へ鑿を加えていましたっけ。正午になると、小使が持ってくる、ごく普通の弁当を食べて一日をそこで暮すのです。ロダン先生みたいに、僕らも芸術を楽しんで一生を送りたい。芸術のうちで、彫刻は、具体的かつ実質的だから僕は気に入ってますよ」

ロダンのこととなると、話しているうちに、熱が入って、淀みなく語りつづけた。

「具体的かつ実質的か。なるほどね」

悌二郎は、しきりに思い入っている様子だった。

「やっぱり彫刻でないと駄目だ。画ときたら、どうもとりとめがなくなって……」

彝がすかさず応じた。

「そんなことないさ。おい中原。ロダンはえらい。僕も尊敬は君に負けないつもりだ。といって、彫刻万能はおかしいぞ。そこまで、つっ走るのはまちがいだよ」

「レンブラントがあるというんだろう。ルノアールがあるというんだろう。それやレンブラントもあり、ルノアールもあり、セザンヌもある。ミケランジェロだってある。だが、僕にとっては、彫刻の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

実質的ボリュームでないと、うまく自分が出せないような気がして来たんだ。画というやつはそこがもどかしいな。昨日読んだ『新声』だかに黒田清輝の陰影論——物体の黒い影の論だ。そんな論が出ていたが、西洋の大家がやっている陰は一般に黒くて不快の感をまぬがれない。ドイツ人のごとき幽愁な思想をもっているものは知らず、日本人のごときは将来陰なんか使わないで、独特の明るく面白い絵画を創作するだろうと予言しているんだよ。陽色は美で、陰は不快だというんだ。陰の美を知らないんだから話にならないよ。荻原さんのあの『坑夫』だって、眉間に漂っている憂鬱な陰こそすばらしいじゃないか」

「滅茶だよ、それは。黒田清輝が駄目なのは絵画の罪じゃない。『坑夫』がいいのは彫刻だからではあるまい」

「そのとおりさ。理屈はそうだろうが、大先達の黒田清輝あたりが、のん気きわまる気焔をあげているのを聞くと、ついそんな気がしてくるから妙だ。僕のように、北海道で生れ、北海道で育った人間には、暗い陰影は自分の身についたものだ。だからこそ光りかがやく陽光にもひかれるわけさ。自分は人生の矛盾、人間の苦しみ、迷い、悶えを眺めたい。つまり、飾らざる自己そのものの影を見出したいのだ。自分はロダンにおいて遺憾なく自分の希望を満すことができる。原始的な雄渾な俤は無論のことだが、絶望的な懊悩と憂愁の影が実に力強く表現されている」

「わかったよ。つまり、ロダン礼讃さ。絵画を否定することはないよ」

悌二郎と彝が横あいから出しぬけに議論をはじめて、かんじんの守衛の口述がとれなくなったのはこまったが、久美子は議論のなりゆきに興味を覚えた。ロダン論議がつづいて、その間に守衛の発言があれば、それでいいと思った。そこで、改めて悌二郎と彝とに目をやった。二人ともなりふりかま

わず、髪は蓬々とのび、全身薄汚れた感じは共通していた。十月というのに、悌二郎は汚れてしわくちゃの単衣をまとうただけで、シャツも襦袢も着ていない。彝は痩せたからだをシャツや毛糸で包み、袷を二枚かさね、黒の木綿の紋つき羽織に、白い太紐、帽子は黒のソフトをお釜形にしてかぶっていた。襞も縞目も見えないような袴をはいていたが、いたるところ、絵具がとび散っていた。

「おっと、忘れていた。荻原さん、おみやげを持って来ましたよ」

そう言って悌二郎は、ふところから新聞紙の包みをとり出した。五六枚の餅だった。

「釧路のおふくろが送ってくれたんです。黄粉も入っていました」

「ありがとう。釧路の餅か。旭川じゃなかったのかね」

守衛に聞かれて、悌二郎はなぜか頬を染めた。

「旭川は養母。釧路は実のおふくろです」

「おふくろっていいな。中村屋でカアサンに焼いてもらおうか」

守衛が新聞紙の包みを受取ると、そこへ久美子は両手を出して、

「わたしが、ここで焼いてあげますから、みなさま、もっと議論をつづけて下さい」

と言った。

「こんな滅茶な議論、つづけようがないですよ。だが、さっきの黒田の陰影論にはおどろいた。あの大先生、それほど単純かね。こんな話がある。着物についた汚物を洗おうとしても、頑として肯かない狂人があるそうだ。芸術を豊かに深くするものは、この汚臭だと僕は思うな。体臭なく、汚点なき芸術は、生きた芸術じゃない。レンブラント、ルノアール、ロダンの偉大さはそこにあるのさ」

彝がそんなことを言い出すと、悌二郎は笑って、

「これゃおどろいた。僕が悪臭居士って仇名されてるからって、そこまでいうことはないよ。ロダンの偉大は汚臭にあるなんてからかうのもいいかげんにしてくれ。そうでしょう、荻原さん」

「新説傾聴するよ。例のバルザック像のどてらなんか、汚臭がありそうだナ。ははははは……」

守衛は小柄なからだをゆするようにして、笑った。

悌二郎は、太平洋画会の仲間たちから、悪臭居士と仇名を呼ばれていた。彝は、下谷の太平洋画会の研究所で、悌二郎と初対面の印象をあざやかに覚えている。髪は雑草のように乱れ、顔や手足が一面に木炭の粉末と垢とに掩われて蒼黒く、凄惨とでもいうべき気味があった。そのくせ、貧乏臭さや不潔な感じはまったくなく、全体として明るかった。傘がないので、雨の日などは、ぬれ鼠で研究所へやって来て、ストーブの前に、立ちはだかり、全身から湯気を立てて、着物を乾かしていた。画学生たちは消しゴム代りに食パンを使っていたが、その皮が板の間に散らかり、踏みにじられている。悌二郎は拾って、泥をはらってうまそうに食べた。しかし、彼がやると、すこしもみじめな感じはなかった。二人はたちまち親密になった。気質の相呼び、相応ずるものがあったにちがいない。

悌二郎は、札幌中学を終えると、叔父である養父の反対をおしきって、洋画家を志し、家出をして東京へ出た。雑貨商の旭川の養家には、遊学の送金ぐらいはできる余裕があったが、洋画家志願に反対のため、鐚一文も送らなかった。漁場の親方だった釧路の実家の母が家族の人に隠して、月々七円の為替と、ときおり食物や衣服を送ってくれた。新聞配達やなにかでいくらかの金はえたが、部屋代と食費のほかに、月謝をはらい、絵具その他の材料や参考書を買うことは至難のことだった。朝は、得意とした大根の味噌汁に昨夜の残飯を入れて雑炊をつくり、少しばかり啜って、残りを弁当につめて研究所へやって来たが、米や味噌はおろか、大根を買う金もないようなことがしばしばあった。そ

れでも平気だった。立ちん坊をやれば、二三銭を手にすることができた。立ちん坊とは、坂の下に待っていて、人力車なり、荷車がくると、うしろから押しあげて、一銭なり、二銭なりの謝礼をもらうことだった。下谷附近には、さいわい坂が多かった。そして、二銭あれば存分に焼芋が買えた。五銭あれば、上等の、うまい餡パンをおごることができた。下谷七軒町に三畳で一円五十銭の貸間に住んでいたが、「自由なるわが小王国」と日記にしるした、暗い部屋は、自炊用のこんろ、鍋、米櫃、味噌桶、醤油瓶の間に、鉢や茶碗や丼がころがって、大根や芋や菜っ葉の残りがある。画集や書籍の入った蜜柑箱がいくつか重ねてあって、古雑誌や絵道具が、散らばっていた。汚れた壁には、ミケランジェロ、レンブラント、ルノアール、コロー、セザンヌ、ロダン、ブルーデルなどのデッサンや作品の複写がはりつめられていた。

文学や哲学好きの読書家でもあって、本郷の古本屋から、八十銭も奮発して、フランスの文豪ビクトル・ユーゴー原著、尾崎紅葉訳の「鐘楼守」を買いこんだり、国木田独歩のものは、「武蔵野」「独歩集」「運命」「濤声」などの作品集は全部揃えていた。トルストイ、ツルゲーネフ、ゴリキー、アンドレーエフ、イプセン、モーパッサンなど西洋の作家たちの翻訳物は、古本が見つかると、買いこんで来て、片っぱしから読んだ。明日の米を買う金がなくなっても、かまわなかった。三畳に積みかさねてある、それらの小説本や画集の半分以上は本郷森川町の質屋にあずけてあるはずだった。しかし、独歩のものは決して手放さなかった。独歩の書いたものが載っている古雑誌は、一存に及ばず買いこんだ。それらに読みふけって、夜を明かすことは、しばしばだった。空腹をこらえて、丸善を訪ね、そこの書棚から、ダ・ビンチ、ミケランジェロや、ミレー、セザンヌ、ドラクロワ、ターナーなどのデッサンを取出して、のぞきこみ、収めては、また取出すのだった。上野の図書館で、明治のはじめ

に、オランダ政府から寄贈されたレンブラントのオリジナル・エッチングを探し出し、有頂天になって、仲間に吹聴したこともある。

新帰朝の中村不折の指導する太平洋画会研究所のデッサンの勉強は、仲間の誰よりも熱心だったが、自分の気に入った画は、なかなか描けなかった。下谷の坂道や森や塔なぞをにらんで、一日中画架に向っていても、くれがたには、白く塗りつぶして帰ってくる日が多かった。これでよしと思う線一本引けないのが、もどかしく、なさけなかった。そんなときは、画家志望でない、別の友人を訪ねて行った。赤坂に住む札幌中学の同窓葛城は、そんな悌二郎をこころよく迎えた。珍しく大雪がふって、弁慶橋のあたりが、芝居の舞台めいた雪景色を見せた日のことであった。時ならぬ悌二郎の来訪を喜び迎えた葛城は、銭湯であたたまっていてくれと言って湯札を渡して、ちょっと用事があるからと外出した。悌二郎が存分あたたまって戻っても、帰っていなかった。まもなく、「やあ待たしたな。大成功さ、このとおり」と顔中を微笑で埋めて、右手で酒の一升瓶、左手で牛肉の包みをつき出して見せた。神保町の質屋へ羽織と袴を持って行って、これを買って来たのだった。

しかし、日ごろの訪問先は、きまったように、大久保百人町の時計屋の二階、彝のところだった。彝は水戸っぽで、士族の子弟だったが、早く両親に死別し、陸軍士官だった長兄の保護を受けていたが、近衛第一連隊の中隊長として満洲に出征した長兄は沙河会戦で負傷した後、胸部に貫通銃創をうけて戦死した。その三年前には、名古屋の陸軍幼年学校の生徒だった次兄が器械体操で胸を打ち、それがもとで死亡した。次兄と入れ替って、彝は同じ学校へ入ったが、しばしば発熱のため練兵休をとった。辛うじて同校は卒業したが、ついに肺病と診断され、東京の中央幼年学校へ移ると同時に退校した。孤独な彝は、しばしば死を考えた。画を描くことが唯一の慰めだった。長兄の遺族年金と水戸

を引きはらった時のまとまった財産があったので、経済的には不安のない日を暮すことができた。太平洋画会研究所へ通い出してからは、弱いからだで精力的な勉強をつづけた。四十年五月の、よく晴れた日曜の朝、市ヶ谷教会で、植村正久から洗礼を受けた。夕方、戸山ヶ原なぞを散歩していると き、急に立ち止まって、祈りをささげることがあった、涙を両頬に伝えながら。しかし、その後一年あまりの煩悶と思索は、彼の足を教会から遠ざけたらしかった。

「天国にして、エスの仰せられし如く、嫁入らず、めとらず的のものならば、如何に美しくあつても、僕が行く所ぢやない」

そのころ、悌二郎へ送った絵はがきに、こんな言葉が書きこまれていたことがあった。

悌二郎は、三日をおかず、時計屋の二階に彝を訪ねた。時には、研究所の仲間の鶴田五郎とつれ立って行くこともあった。五郎は早稲田中学で、彝の後輩でもある。彼らの友情は恋に近いようなものだった。会すれば談じ、論じ、弁じて夜の更けるのを知らなかった。訪問されるのは、一方的に時計屋の二階だった。悌二郎の三畳では、本人のほかにひとを入れる余地がなかったのと、病身の彝に長い道を歩かせるわけにはいかなかったからだ。その代りというわけでもあるまいが、彝はしばしば悌二郎にあてて、はがきを書いた。たいていは絵はがきに数行のものだったが、悌二郎と別れると、追っかけるように、書くらしかった。たとえば、こんなふうだった。

「絶対の調和は空虚であり、絶対の美には力がない。ラファエルや応挙の弱点は、そこにある。無頓着な衣を着た鋭感。均斉を乱す注意深き破調。雑音の中に走る旋律。母岩の中に光る宝石。混乱、唐突、分裂を貫く精巧な秩序」

こんなのもあった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com